

平成 26 年度 文学部プロジェクト研究 研究活動報告書

	職名	准教授	氏名(代表者)	萩原直幸	配分額	620,000 円
プロジェクト名	1770 年生まれの思想家・文学者・芸術家をめぐるヨーロッパ地域文化研究					
目的と活動の概要	<p>[研究の目的]</p> <p>1770 年にフランスまたはドイツに生まれた思想家、文学者、芸術家のうちの数人を取り上げ、彼らの思考の相同性・近親性と同時にその相違について明らかにすることを目的とする。</p> <p>[活動の概要]</p> <p>公開の研究報告会を 2 回開催し、活発な質疑応答、意見交換を行った。以下は各報告の概要である。</p> <p>第 1 回 (2014 年 7 月 30 日 15:00~17:00)</p> <p>○宮川栄司「Fr. ヘルダーリンにおける「変革」と「蹉跌」: ヘルダーリンの事実上の創作活動全体の凡そ半分、その前半部に相当する、1790 年~1798 年にかけての思想的芸術的営為の概要の呈示が試みられた。この第一段階では、内的空虚を克服する為の決定的契機として、実在する「理想の原像」が確信され、それにより主体は画期的な自己実現の可能性を獲得する。次段階では、この範型をより精緻な規定と根拠付けを通して普遍的原理として外部領域全体に適用する事で、世界を人為的に「変革」するための構成的な理論と構想とが暫定的に成立する。しかしこの理想主義的構想は、歴史的個別体としての実社会の内に認識された重大な否定的機能との対峙により、その妥当性を相対化されるに至り、現実の厳格性に対応したより高次の思念へと展開していく。</p> <p>第 2 回 (2015 年 3 月 27 日 13:00~16:30)</p> <p>○萩原直幸「セナンクールとヘルダーリン——とくに『オーベルマン』と『ヒュペーリオン』をめぐって」: セナンクール (1770-1846) とヘルダーリン (1770-1843) は生年が同じで没年も近接している。両者間にとくに影響関係は認められないが、彼らの生涯には、官吏の父、神学校や教会との関わり、家庭教師、放浪生活、報われない恋など、多くの点において類似点が認められることを指摘した。また、それぞれの代表作である『オーベルマン』(1804) と『ヒュペーリオン』(1799) を比較検討し、その異国情のタイトル、書簡体形式、挫折の物語、自国民批判、自然の問題、理想の女性といった点における興味深い類似と相違があることを提示した。</p> <p>○竹島あゆみ「愛による運命との和解——初期ヘーゲル思想とヘルダーリン」: 本報告では、初期ヘーゲル思想に対するヘルダーリンの影響を扱い、とりわけベルン期 (1793-96) 末からフランクフルト期 (1797-1800) までの、ヘーゲルの思想における二回の重要な転機に対する、ヘルダーリンの影響について考察した。具体的には、ヘーゲル初期思想における①カント的理性主義から愛による合一の哲学への転換、②合一哲学における反省・分裂の契機の否定から受容への転換という二つの転機について論じた。</p> <p>○大杉 洋「『エグモント』をめぐって ——ゲーテとベートーヴェン——」: 1770 年生まれの作曲家ベートーヴェンが、劇音楽を作曲したゲーテの『エグモント』を取り上げた。この作品が描かれた時代は 16 世紀であるが、「激動」、「変革」の時代であったという点においては、18 世紀後半のヨーロッパと共通している。『エグモント』の登場人物達の発言からは、自由を希求する民衆の声、民衆を見下す為政者の声、時代の大きな変化を予感しつつも個人としてはなすすべがないことを嘆く声等に、この作品が生まれた時代 (フランス革命前年) の空気感を読み取ることが出来る。</p> <p>[成果と今後の展望]</p> <p>成果としては、竹島が論文「ただ愛の中でのみひとは客体と一つになる——初期ヘーゲル思想とヘルダーリン・1——」を岡山大学文学部紀要 63 号に投稿した。他のメンバーも論文を紀要等に発表する予定である。今後の展望については、平成 27 年度に外部から講師を招いての講演会ないしシンポジウムの開催を計画し、さらに研究の幅を広げ、また深化させたい。</p>					
	関係教員等 (代表者※印)	氏名	所属・職名	役割分担		
	大杉 洋 竹島あゆみ 萩原直幸 (※) 宮川栄司	文学部 (言語文化学)・准教授 文学部 (哲学芸術学)・准教授 文学部 (言語文化学)・准教授 言語教育センター・准教授	ゲーテ・ベートーヴェン研究 研究報告会準備、ヘーゲル研究 研究統括、セナンクール研究 ヘルダーリン研究			